

神の御子を身ごもった マリアを支えたヨセフの信仰

マタイ1章18～25節
2020年12月13日
松田 基子 師

天地万物を創造(そうぞう)し、人間に命と使命を与えて世に送り出された神様は、人間の祖(そ)が神様に背(そむ)いて永遠の滅びに向かい始めたその時から、地上の歴史を、人類救済のための歴史に導かれました。

その神様の人類救済計画は、神様の招きと、その言葉に心から従った人々によって、二千年もの永きにわたって担(にな)われて来ました。神様の選びは、常に神様に全信賴して、御自身の御言葉にかけて従う人々によって、担われてきました。

アブラハムは神様に絶対的な信賴を置き、神様から受けた、祝福の源になるようにとの御言葉にかけて、行く先も知らずに従ったことによって、救い主誕生のための民族の祖(そ)に選ばれました。神様はアブラハムの子孫イスラエルを神の民に選び、神様を心から愛し、従ったダビデ王に対して、

「彼の子孫にとこしえの王座を与える。」と約束されました。

時を経て、とこしえの王座は、預言者達を通して救い主メシアによる支配であることが明らかにされて行きました。神様はアブラハムの選びから二千年、ダビデの選びから千年を経て、紀元一世紀が始まろうとする時、いよいよ人類の罪を贖(あがな)うことの出来る神の御子(みこ)を、人の世に誕生させようとしておられました。神の御子がこの世に産まれてこられるためには、母の胎(たい)が必要です。神の御子の母に選ばれたのは、ダビデの子孫ヨセフの許嫁(いいなずけ)のマリアでした。

マリアは、天使ガブリエルから聖霊によって、神の御子をその身に宿す事を告げられました。マリアは不安を抱きながらも、神様に全信賴し、神様に従うことを人生の使命として、

「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」とその身を神様に差し出しました。

マリアが何故、そのような神の御子の母親に選ばれたのか、その大切な要件(ようけん)は、彼女が、神様から救い主誕生が約束されてきたダビデの子孫、ヨセフという人の許嫁(いいなずけ)であったことにあります。神様は既に2人が産まれる前から、ご計画に従って信仰を与え、導いて来られました。

マリアは、天使ガブリエルの受胎告知の後、神様のご計画に、共にあずかっている、信仰を共有し、励まし会える、親類のエリサベトの許に行って、3か月程滞在し、その後、自分の家に帰ってきました。マリアの神様に対する献身の思いは、エリサベトとの信仰の交わりによって、一層強められました。

しかし、マリアは家に帰って来ると、現実に戻されました。体の変化にも気付きました。当時の女性の地位は低く、女性は公の場での発言や弁明は出来ませんでした。やがて許嫁のヨセフが、マリアの妊娠に気付くところとなりました。

当時のイスラエルにおける結婚は、幼い頃に親同士が約束をしたそうです。そして、男子は20歳前後、女子は15歳頃迄に、親が決めた相手と結婚の意思があるかどうかを確認して、1年間の婚約期間を経て後、正式な結婚式を挙げたそうです。

この時の婚約は、結婚に準ずる効力を持っていました。マリアとヨセフは、丁度その婚約の時期を過ごしていました。マリアとの結婚式を指折り数えて待ち望み、その日に備えて一生懸命働いていたヨセフにとって、マリアの妊娠は、彼に大きな動揺を与えました。

さて、マタイ福音書は、その事について、とても冷静に記しています。マタイ1章18節に、
「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。」
と記されています。

ここには、
『マリアの妊娠は、聖霊によるものだ。』
と記されていますが、それはマリアにだけ告げられた事であって、人々が会堂に集まり、礼拝を献げているところに天使が現れて、全会衆に向かって宣言した訳ではありません。神様は、マリアにそのような助けを与えてはおられません。ここで、大事な事は、信仰は神様に全信頼して、自分の決断で、神様の言葉にかけて従うことです。マリアはその信仰で神様に従いました。

ヨセフはどうするのでしょうか。
19節を見ますと、
「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」
とあります。ヨセフはダビデの血筋を引く者で、市井(しせい)の中に埋もれていても、神様への信仰は堅く、正しい人でした。ここでの正しいと言う意味は、律法(りっぽう)に心から喜んで、忠実に従おうとした生き方のことを言っています。世間の目ではなく、神様を畏(おそ)れて生きていたと言う意味です。ですから、ヨセフにとって、

律法を守ることは最優先事項でありました。

マリアの妊娠が、聖霊によるものだと知らないヨセフは、見えるところから判断して、マリアは罪を犯していると思い込んだ様です。もしも、ヨセフがその事を訴えるならば、マリアは律法で裁かれ、さらし者になり、姦淫罪(かんいんざい)で石打にされるに違いありません。ヨセフはマリアをそのような目に合わせることは出来ません。

そこで、ヨセフは考え抜いて、
『何が何でも、神様に背くことだけは出来ない。つまり、律法に違反して、罪の女を娶(めと)ることは出来ない。』

だからと言って、マリアを窮地に追い込むことも出来ない。となれば、

『密かに離縁する道しかない。』
と決意したのです。

当時の女性の地位は低く、男性は2人の証人を立てて、離縁状を渡せば、理由は何であれ、離縁が出来ました。そうすればマリアは、子どもが生まれても、生きて行く事が出来ます。その決心をいつ行動に移すべきかを思い悩んでいる所へ、神様はヨセフの眠りの中に、夢を見させ、天使を通して御心を示されました。

天使は、ヨセフに呼びかけました。

「ダビデの子ヨセフ。」

この呼びかけには、大きな意味がありました。救い主メシアは、ダビデの子孫からと言うことは神様の約束であり、ユダヤ人は皆、その事を知っていました。ですから、ここで、

「ダビデの子ヨセフ」

と言う呼びかけには、

『神様が救い主をお遣わしになる時が来た。神様はそのためにあなたをお用いになる。』
と言う意味が込められていました。

天使は続けて

「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリア

の胎の子は聖霊によって宿ったのである。」と告げました。ヨセフは神様を心から信じていました。それだけに神様の前に、罪を犯すことを最も恐れていました。ヨセフは、神様の前に正しくあろうとして、マリアとは離縁しようと考えました。ヨセフは正しく、立派な人でしたが、マリアの罪と一緒に負うところまでには、想いが及びませんでした。それが人間の限界です。

ヨセフの正しさは、人に左右されるものではありませんでしたが、神様の前に罪を犯さないために、自分の正しさを守ることで精一杯でした。自分が犠牲を負う迄には至りませんでした。しかし、考えて見ましょう。神様が御自身の正しさを振りかざして、人類に接してこられたなら、人類はとっくの昔に滅んでいたでしょう。御子を人類の罪の贖(あがな)いに、人の世に送られる。それは神様が御自身の正しさを超えて、人類を愛されたからです。

『ヨセフよ、あなたも正しさを超えて愛に生きなさい。』と押し出されました。それが「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。」との言葉でした。

正しさに生きようとしたヨセフは、神様に背く事を恐れましたが、神様はすでに、マリアをヨセフの妻と呼んで、彼女をお与えになっていました。

「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」この言葉によって、神様の御業(みわざ)によることがはっきりと分かりました。ヨセフは大きな安堵と共に、自分の考えの狭さ、愛の小ささを感じたことでしょう。

そこで、天使は言いました。

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」と。

当時、産まれてくる子の父親に、その子の命名権がありました。この命令は、神様がヨセフに、父親としての親権を与えられた事を意味します。

イエスという名は、信仰の篤(あつ)い親達が、産まれて来る子どもによく付けた名前でしたが、『神は救いなり』と言う意味です。何故その名を付けるのか、岩波訳によりますと、

「なぜなら、彼こそが、彼の民をその諸々の罪より救うからである。」とあります。ここに救い主メシアは「罪から救う救い主である。」ということが示されています。

神様は人類の祖が、御自身に背いて罪を犯し、永遠の滅びに向かったその時から、人間を、『永遠の滅びに向かわせる罪からの救い』をご計画になり、人類の歴史を進めてこられたのです。マタイはこの事に対して22節で、「このすべてのことが起こったのは、主が預言者(よげんしゃ)を通して言われていたことが実現するためであった。」と言っています。イスラエルの歴史を溯(さかのぼ)ると、神様は、イエス様の降誕(こうたん)より七百年も前にイザヤを通して預言(よげん)をお与えになりました。

イザヤ書7章14節に、「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」とあります。マタイはこの名は『神はわれわれと共におられる』と言う意味である。」

と説明を加えていますが、イザヤの預言はシリヤ、エフラエム戦争の脅威に恐れた、ユダ王国のアハズ王に語られた言葉とされています。神様は、ユダ王国を見捨てられず、助けられる

徴(しるし)に、

「**嬰兒(みどりご)が産まれる**」
と預言を与えられました。

ところで、神様のご計画は、そこで終わったのではありませんでした。後の日に、人間を永遠の滅びに引きずり込んで行く罪を贖(あがな)い、人間の存在そのものを救う、真の救い主が、乙女から産まれる事が預言されていたのです。

神様は人間を創造されたその初めから、人間の祖が、神様に背き離れたにも拘わらず、

「(あなたは)どこにいるのか。」
と探し求め、人間を離されることはありませんでした。人類の歴史は常に神様に背き続けてきましたが、神様は人間の命の与え主として、決して見捨てることをなさいませんでした。

神様は常に人類を憐れみ、共に歩き続けて下さいました。そして、遂に人類を罪の滅びから救うために、神の御子を人として、人の世の直中に人と共にいるために、この世にお遣わしになるのです。文字通りインマヌエルの神として、人類の歴史の直中に入って来て下さるのであります。その事のために、ながいイスラエルの歴史の中に、約束されて来た、ダビデの子孫からヨセフが選ばれたのです。マリアもまた、神の御子を宿すべく選ばれていました。神様は、生まれる前から、二人をお選びになり、ご計画を進めてこられたのですが、二人はそれぞれに神様に対して、全身全霊をもって従いました。

24節に、

「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。

そして、その子をイエスと名付けた。」

とあります。ヨセフの偉さは、神様の言葉の前に、自分の考え、周囲の思惑のすべてを捨てて、

ただ神様からの言葉だけを聴き、神の言葉に賭(か)けたところにあります。ヨセフはそれと共に、マリアとイエス様を命がけで守っています。イエス様がこの世に人となって誕生されるためには、マリアだけではなく、ヨセフの存在がありました。ヨセフの存在、支え無くして、マリアはイエス様を産み、育てることは出来ませんでした。

神様の御言葉に従った、マリアとヨセフによって、神の御子が降誕(こうたん)され、このお方に依って人類に、罪の滅びから救われる道が開かれるのです。私たちも、この身を主にお献げして、御子の降誕(こうたん)に備えましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様
神の御子イエス様が、真の救い主として
この世にお生まれになるために、
ヨセフは神様の御言葉(みことば)だけを信じて
マリアを愛し支えました。

信仰は、神様の御言葉を心から信じて
従うことです。私たちも、私たちの救い主
イエス様の御言葉を信じ、従って行く者
とらせて下さい。

尊い救い主イエス様のお名前によって
お祈りを致します。

アーメン。